

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320063

研究課題名（和文） 翻訳、横断性、共同体の問いに関する総合的研究

研究課題名（英文） Comprehensive studies of questions concerning translation, cultural crossing and community

研究代表者

山田 広昭（YAMADA HIROAKI）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40210471

研究成果の概要（和文）：翻訳と文化の横断性に関する理論的・歴史的考察を軸に、それらが＜他なるもの＞としての文化・社会の受容、理解、共存という課題にどのような視点や展望をもたらしているのかを考察した。自らの文化的同一性（固有性、本来性）を求める動きは、多くの場合均質で単一化された共同体を目指す運動へと収斂させられてきたが、そうした動きの内実をヨーロッパと非ヨーロッパ地域の双方の文学と思想を突き合わせつつ研究することで、どのような文化も＜異なる他者＞を広い意味での翻訳を通して自らの内に取り込むことでしか成立しえないことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We have studied the ways of embracing, understanding and coexisting with different cultures and societies as <others>, focusing on theoretical and historical considerations of translation and cultural crossing. While the pursuit of cultural identity (particularity or authenticity) often ends up seeking for a homogeneous community, our studies of both European and non-European literature and philosophy have reached the conclusion that no culture can establish itself without incorporating different <others> by translation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2011年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2012年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総計	12,400,000	3,720,000	16,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：翻訳、文化横断性、共同体、クレオール性、ポストコロニアル

1. 研究開始当初の背景

（1）研究代表者を始め、本研究の主要な担い手はすでに2007年から2009年にかけて科学研究費補助金基盤(B)の支援を受けて翻訳と文化横断性をめぐる研究を行ってきた。

（2）そこで明らかになったことは、上記のような研究課題は、国民国家成立に代表される近代以降の共同体の変容、さらには20世紀後半に顕在化するポストコロニアルと名付けられる現代世界のあり方を視野に収めなくてはじめてその解明に取り組むことがで

きるということであった。

(3) 同時に、こうした研究は、同化でも吸収でもない形での多文化の共生をさぐるという現代世界の焦眉の課題の追求に微力ではあっても貢献できると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、翻訳と文化横断性についての理論的・歴史的考察を軸として、現代世界のポスト・コロニアルな文化状況が孕む問題系を浮かび上がらせ、それらが〈他なるもの、異質なものである文化・社会〉の受容、理解、共存という課題にどういった新しい視点や展望をもたらしているのかを考察することにある。

それは、文化が常に直面してきた、複数の文化、言語間の翻訳という問題系を〈他者との関係〉としてとらえ、共同体のあり方についての総合的な反省へと結びつける試みでもある。

3. 研究の方法

18世紀以前のヨーロッパにおける翻訳の様態を視野に収めつつ、それとの対照において、20世紀以降現代にいたるまでの翻訳と文化横断性の実践の特質をポストコロニアルという視点を取り込みながら解明するという方法をとった。具体的には、

(1) 山田は、研究代表者として研究全体の組織化に意を用いつつ、国民国家的な共同体を絶対的に優位にあるものとみなす理念・信念に対抗して起こった思想である社会主義的、アナキズム的なインターナショナリズムの運動と文学、芸術との関係について、共同体論の観点から主としてフランスに事例を求めつつ研究を行った。その際、政治的な立場は異にしつつも、文化内部の他者性にきわめて鋭敏であったヴァレリーの思想の研究を参考軸として平行させた。

(2) 湯浅は研究分担者として、翻訳の問題系と〈他者との関係〉の問題系がどのように交錯するのかというテーマについて、主に理論的な観点からの考察を行い、その具体的なあらわれを様々な事例（ベンヤミン、ブランショ、パタイユ、ランボー等のテキストの読解）を通じて探求した。

(3) もう一人の研究分担者である星埜は、現代世界におけるポストコロニアルな文化状況を先鋭的に表している事例として、カリブ海アンティール諸島と太平洋のニューカレドニアにおけるクレオール文学の研究に取り組んだ。またシュールレアリズムについても植民地宗主国フランスにおいてアフリカを中心とした非ヨーロッパ圏の民族芸術に対する関心を掻き立てるのに大きな役割を果たした運動として研究を進めた。

(4) 連携研究者の田尻は、南アフリカ出身

のノーベル賞作家クツェーと、ポーランド出身で英語作家となったコンラッド、アイルランド出身で英仏二言語で執筆したベケットの研究と連動させながら、越境的作家という観点から捉え直しを行った。

(5) 他の連携研究者はそれぞれの専門分野に応じて、すなわち、西中村は、社会主義レアリズムの研究を通じて、鍛冶は、ドイツ・ロマン派を翻訳思想の観点から研究することで、丹治は、帝国主義の本山であったイギリスにおけるイングリッシュネス研究を通じて本研究主題の解明に貢献する。残る連携研究者のうち、武田は、18世紀イギリス小説と植民地帝国との関係の考察をデフォーを中心に進め、宮下はラブレールとモンテーニュの翻訳を進めながら、ルネサンス期における翻訳と文化横断性との関係を明るみに出すことを試みた。この両者の研究は、冒頭に述べたように、本研究の主たる対照である20世紀後半以降の文学と思想に対して、いわばその参照軸、比較軸を与えるものとなることが意図された。

4. 研究成果

(1) 本研究の最初の成果は、平成23年1月28日に東京大学駒場キャンパスにて開催した国際シンポジウム「同一者は他者か？－翻訳と文化横断性再考」であり、フランスから2名の研究者を招聘し、うち1名は、東アフリカの複数言語使用状況を背景として、ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴの活動を翻訳の問題と絡めて論じ、もう一名は、フランスにおけるアラビア語文学の翻訳状況を日本文学の翻訳状況との比較において、やはり歴史的社会的文脈に十分な検討を加えつつ論じた。本研究グループからは星埜が、自身が行ったカリブの作家シャモワゾーの小説作品の日本語訳を巡ってどのような問題が生じたかを報告した。三者の報告は、翻訳が一つの言語で書かれたテキストを別の言語へと移すという操作にはとどまらないことを、そしてその置かれている地政学的条件、言語的条件の複雑さを浮き彫りにした。

山田はまた本シンポジウムの組織と平行して、19世紀末のインターナショナリズム運動であるアナキズムと文学、芸術との関わりについて解明を進めるために、フランス国立図書館で資料調査を行い、フェネオンやミルボー、ダリアンといった作家たちについていくつかの新しい資料を発掘した。これらの作家、批評家たちのテキストは、目指されるべき共同体と文学作品との関係を考えるにあたって貴重な示唆を与えるものである。

(2) 2年目以降の研究成果として特筆すべきは、何よりもまず、湯浅による単著『翻訳のポイエシス：他者の詩学』の刊行である。本書は、ベンヤミンのテキスト「翻訳者の使

命」を読み解くことを機軸に、翻訳という実践がいかに他者との関係の捉え直しという問題と不可分であることを証明したものであり、今後、翻訳の問題を理論的、思想的に考えるにあたって必ず参照しなければならない著作となった。

(3) また、招聘研究者による以下のような講演会、シンポジウム等の開催も本研究の重要な成果である。

まず23年度には、ロンドン大学アンドルー・ギブソン教授によるショーペンハウアーやベケットについての講演、24年度はヨーク大学デレク・アトリッジ教授によるクツェーについてのセミナー、ほかベケットについての2件の講演会、さらには、パリ第10大学ウィリアム・マルクス教授によるギリシア悲劇と能との比較研究の発表(「ギリシア悲劇を異郷化する：能の国のオイディプス」)を行った。24年度はさらにニューカレドニア教員養成学院のアミド・モカデム教授による、ほとんど日本の聴衆に知られていない現代ニューカレドニア文学の紹介、ドイツ語と日本語の二つの言語で多数の小説を執筆している作家、多和田葉子氏を迎えて、彼女の提唱するエクスポニーという概念をめぐるシンポジウムの開催も挙げなければならない。本シンポジウムは二百名を越える聴衆を集め、活発な議論を引き起こした。

(4) 当初の研究計画にはなかったことであるが、2011年3月の東北大震災と福島原発事故は本研究にもインパクトを与えずにはおかなかった。その一つのあらわれが、日本にとどまらない多くの作家がこの衝撃にどのように対処したかを議論するシンポジウム「災害と文学」の開催(2012年7月)であった。また星柎は、本研究の重要な対象地域であるマルチニックの学会から招待を受けて3月11以降の日本の状況をめぐる講演を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計14件)

- ① 山田広昭、「ポール・ヴァレリーとフランス精神分析」、『思想』通巻1068号、岩波書店、2013年、pp.207-224. 査読無
- ② 丹治愛、「モダニズムにおけるジャンル横断的詩学：ヴァージニア・ウルフ『波』における小説と詩」、『英文學誌』55号、2013年、pp.1-16. 査読無
- ③ 山田広昭、「ポスト3.11を語ることは可能か：事後性をめぐって」、『批評研究』1号、論創社、2012年、pp.38-52. 査読無
- ④ 湯浅博雄、「ランボーの詩の翻訳について」、『文学』13巻4号、岩波書店、2012

年、pp.28-39. 査読無

- ⑤ 武田将明、「イギリス文学：現況と翻訳・研究」、『文芸年鑑』、2012年、pp.89-92. 査読無
- ⑥ Yoshiki Tajiri, “Everyday Life and the Pain of Existence in Happy Days”, *Samuel Beckett and Pain*. Ed. Mariko Hori Tanaka, Yoshiki Tajiri and Michiko Tsushima. (Amsterdam and New York: Rodopi), 2012, pp.151-169. 査読無
- ⑦ 丹治愛、「道徳と感性の改革：ヴィクトリア朝における動物愛護文化と英文学」、『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』、音羽書房、2011年、pp.63-84. 査読無
- ⑧ 山田広昭、「フェリックス・フェネオン：あるアナキスト批評家の軌跡」、『前衛とは何か？後衛とは何か？』、平凡社、2010年、pp.395-422. 査読無
- ⑨ 星柎守之、「カリブ海とシュルレアリスム：エメ・セゼールと『トロピック』を巡って」、『前衛とは何か？後衛とは何か？』、平凡社、2010年、pp.507-520. 査読無
- ⑩ Hiroo Yuasa, «Sur les rapports entre les *Lettres du voyant* et *Alchimie du verbe*», «Je m'évade! Je m'explique.» - *Résistances d'Une Saison en enfer*, Ed. Classiques Garnier, Paris, 2010, pp.105-118. 査読無

[学会発表] (計8件)

- ① Masaaki Takeda, *Dividualism and Atonement or How to Act after the Quake: Reading Novels by Keiichiro Hirano, Ian McEwan, Fuminori Nakamura and Risa Wataya*, UTCP The UBI SUMUS Series I, 2012年10月26日、東京大学駒場キャンパス(東京)
- ② Moriyuki Hoshino, *Sécurité humaine face à la triple catastrophe: Japon après le 11 mars 2011*, 22e Rencontres Gerontologiques de l'AMDOR 2000, 2012年10月4日-5日、マルチニック(フランス)
- ③ 星柎守之、「アンドレ・ブルトンとシュルレアリスム文学・芸術」、第8回言語態シンポジウム「現代文学の諸側面」、2011年6月17日、東京大学駒場キャンパス(東京)
- ④ 湯浅博雄、「プルーヴ『失われた時を求めて』- 非意志的な記憶、反復」、第8回言語態シンポジウム「現代文学の諸側面」、2011年6月17日、東京大学駒場キャンパス(東京)
- ⑤ 田尻芳樹、「ベケット『クラブの最後のテープ』- 記憶とテクノロジー」、第8回言語態シンポジウム「現代文学の諸側面」、2011年6月17日、東京大学駒場キャンパス

(東京)

⑥宮下志朗、「日本におけるフランス文学の翻訳について」、Fu Jen (輔仁)カトリック大学、2010年4月3日、台北(台湾)

[図書] (計2件)

① 湯浅博雄、『翻訳のポイエーシス：他者の詩学』、未来社、2011年、231p.

② 星埜守之、『ジャン=ピエール・デュプレール：黒い太陽』、水声社、2010年、255p.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 広昭 (YAMADA HIROAKI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：40210471

(2) 研究分担者

湯浅 博雄 (YUASA HIROO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30130842
(H23年度退職、H24年度連携研究者)

星埜守之 (HOSHINO MORIYUKI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10238743

(3) 連携研究者

西中村 浩 (NISHINAKAMURA HIROSHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：80218172

鍛冶 哲朗 (KAJI TETSURO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30135818

田尻 芳樹 (TAJIRI YOSHIKI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20251746

武田 将明 (TAKEDA MASA AKI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：10434177

丹治 愛 (TANJI AI)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：90133686

宮下 志朗 (MIYASHITA SHIRO)

放送大学・教授

研究者番号：90138610